



盛夏談義

1月6日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

1月6日のおはなし「盛夏談義」

看板倒れだよ、とタヅネエが言うので、えっ？と聞き返したが、それっきり後が続かない。午前中の作業を終えて一服していたときのことだ。あぜ道に、ひっくり返したバケツを並べ、タヅネエとおれは並んで腰掛けて、じりじり日に灼かれていた。おれは青いタオルでだくだくだ流れる汗を拭っていた。タオルはもう汗を絞れるほどで、そういうタオルを冗談でおれは「汗かきタオル」と呼んでいた。ユウイチは汗っかきだからな、とタヅネエは鼻にしわを寄せながら言ったものだ。

何が看板倒れなのかと思ったが、おれはTシャツの首の後ろの辺りが汗臭くてタヅネエに臭いと思われぬか、そっちの方が気になっていたの、特に聞き返さなかった。着替えようかどうしようか。でもいま着替えたならそいつも午後の作業で汗だくになってしまうし。そうするとベタベタした服を来たまま帰らなきゃいけなくなる。そんなことを考えてタバコをすばすばやっていたら、今度ははっきりとタヅネエが言った。

「能書きばかり立派でさ、中身がなってないのよ」

おれのことだろうか？一瞬ぎくりとするが、おれではあるまい。おれはせっかちにタバコをふかしながら汗臭いTシャツを気にしているだけの男だ。立派な能書きなんかどこにもない。そっと様子を見るが、タヅネエはおれには目もくれず、つやつやよく灼けた横顔を見せてそのまま続けた。

「メニューだけ見りゃ、そりゃあもうご立派。誰でもこれなら安心だって思うわけ」

政治の話だな、と、そこでおれは思った。口先ばかり上手で、あれもやります、最優先でやります、これもやります、これこそが本当に大事なんです、なんて、誰が聞いても間違いのない御託を上手に並べてみせる。能書きばかりが立派で、その実、じっくり中身をみればまるっきり空っぽで、張り子の寅みたいなことになっている。いまの町長のことを言っているんだろう。けど、おれ相手に政治の話をするなんて、どういうつもりだ？いや、おれのことなんか相手にしてないのかもしれない。急にタヅネエが都会の女みたいに見えてきた。そう言えばタヅネエは仕事をしながら大学に行くつもりだって言うし。

「でも、そう簡単に変わりゃしないだろう」

おれはちょっと大人ぶって言うてみた。タヅネエは初めてちらっとこっちを見て、何だか変な顔をした。その鼻先から汗がぽたっと落ちて、タヅネエのTシャツの胸元に落ちて染みになり、それを見てどうしてだかおれは見てはいけぬものを見たような落ち着かない気分になった。

「変えるんだよ」こともなげにタヅネエは言う。「結局ひどい目に遭うのはあたしたちなんだから、変えなきゃいけぬもんはとっとと変えてしまうんだよ」

大人ぶった物言いをしたおれがガキで、青臭い正論を吐いているタヅネエがオトナみたいなことになった。なんだかアテが外れておれは黙ってしまう。ガラガラ、ガラガラ、眩しすぎる青空を見上げ、肌を焦がしそうな熱気にあえぐ。畑の上を風が吹いてくれれば、それでもずいぶん過ぎやすくなるのだが。おれは目を細めて、腹の中で「何言ってやがる」と言いながら、短くなったタバコを深々と吸い、それからバケツの脇にぐいぐい押し付けて消した。

「あんたもだよ」

「え？」

いきなり振られておれは間抜けな声を出す。なんだかまるで先生に説教されているガキみたいな声を出してしまったので頭にくる。

「大事なものは外づらじゃないからね」

なんて返事すればいいのかわからないので、「おお」と答えた。確かにあの町長は外づらばかり良くて、古い人間が喜ぶような聞こえのいいお題目をぺらぺらまくしたてるが、本当のところは何もわかってないんじゃないかと思っていたんだ。おれにだってわかる。あんなやつと一緒にしないでほしい。

「なりばっかり大きくなってもね」

何か言い返そうかと思ったがやめておいた。タツネエと言い争って勝てるわけがない。そんなにみくびられていたのかと腹が立ってきて、おれは何だか口もきけないような感じになってしまったんだ。

「どうした？ 西瓜の話だよ？」

あやうく「西瓜？」と聞き返しそうになって、呑み込んだ。西瓜の話をしていたのか。

「わかってるよ」

タツネエが面白そうな顔をしてこっちを覗き込んできたので、おれは怒ったような感じになって返事した。

その時西瓜畑の上をざわつかせながら、さあーっと風が流れて、タツネエとおれの汗を飛ばしてくれた。

「ああ気持ちいい」

タツネエが首をのけぞらせて言った。おれも真似して上を向いてみた。北瓜山の上の入道雲が女の身体みたいだと思って見ていたら、すぐ横から声がした。

「あんた来年高校だろ？ タバコはもうやめな。肺活量が出なくなるってよ」

そんなの関係ないと言い返そうとしたら、お腹のところにどすんと今年最初の西瓜を勢いよく置かれた。

(「西瓜」 ordered by トンボ--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じをご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

盛夏談義

<http://p.booklog.jp/book/41897>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41897>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41897>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.